

昭和31年3月20日（火曜日） 毎月1回20日発行

やま博物館

編集責任者 大町山岳博物館



らいちょう
Japanes Ptarmigan

らいちょうは厳しい真冬でも高山に留り、ミヤマハンノキやダケカバなどの樹木の花穂を餌としています。写真は左がメス、右がオスでまだ純白の冬羽を装っていますが、5月頃の雪どけと共に次第に褐色のまだらを増して春羽に変わります。（3月中旬北アで撮影）

色の変る山の動物

＝らいちよう・えちごうさぎ・やまいたち＝

サーッと吹きすさぶ寒風が山の頂に雪びを作り、あたりに想像もつかぬ世界が現出する時、シラビソの原始林、その下に拡がる山麓一帯はアルプスに棲む動物たちにとっては心の温床としてのすみかを与える。高山植物が赤、黄とさまざまに色づけられ、しばらくの間の美しさが過ぎ去ると、岩壁も、波打つハイマツも雪に蔽われてしまう。動物たちは雪に追われて下へ下へと移つて行く。食物が得られないからだ。こんな雪の世界に自然の荒々しさと戦いながら、他の動物たちから取り残されて生活しているのがライチョウである。彼等の外敵は吹雪や雪崩、それだけではない。罅猛なイヌワシが彼等を常に襲いかかろうとしている。あたりは白一色、そんな環境に褐色の彼等がとびまわっていたら、イヌワシの目標になってしまうのだ。彼等は長い進化の歴史を経過して、現在ある姿——全身、純白色、ただ、外側尾羽と、雄だけであるが眼先が黒色——に冬変るといふ形質を得ることができた。そして、環境に順応した身は自身を護るといふ結果になつた。

ライチョウは2,400M以上の高山、ハイマツの生育している地帯だけに棲息している。彼等の食物は高山植物の葉、蕾、実、そこをすみかとする昆虫、蜘蛛などである。夏の間はハイマツを縫つてハナゴケのカーベットを、岩礫地をと背、下頸、胸は黒色で、一面



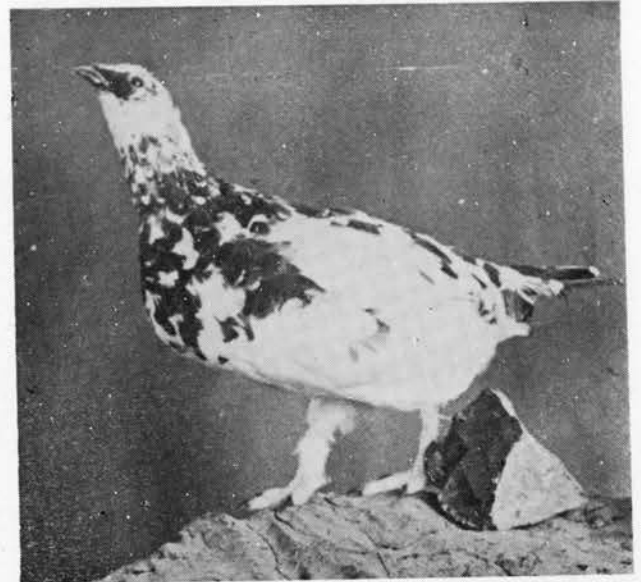
らいちようのヒナ（6月中旬）

に褐色の細い横斑を密生し、腹の白い彼等が雌を、或は雄を求めて動きまわる。その中でも、山肌を飛ぶライチョウの姿は特に美しく感ぜられる。翼の風切羽は夏でも純白色、銀色に光るそのさま、中央の二枚を除いて黒色である尾をたなびくさま—五月になると彼等は藻木の間、又は草間の地上に凹所を造り、枯草、落葉、苔などを敷いて巣をつくり、5~12個の卵を生む。こうして彼等は、高山の烈しい気候と戦いながらヒナとの新しい生活が始まるのである。自然と調和して自己の生活を護りぬくために、ライチョウと同じタイプの動物がそれぞれの生活範囲をもつて、山の自然に溶けこんで棲息している。その中にエチゴウサギとヤマイタチがある。

エチゴウサギは大体北緯36度以北に分布するといわれ、平地から2,700M位のハイマツ帯までの林、草地に棲み、葉、樹皮、昆虫を食べて生活している。彼等は冬、下の林に移動する仲間だ。彼等の大敵はキツネ、クマタカなどで、これも又悩みの多い生活をしているのだ。冬毛には大別して二型がある。その一つは不変型で多くは肉桂色である。もう一つの型は夏、背面に黒い毛を生じ、尾にも黒色帯があるものだ。ライチョウと同じように彼等も冬になると白色に化し、自分の身を、外圍と紛らわしくしてしまう。自然は彼等が生を続け、彼等の子孫を繁榮させるために、彼等を祝福したのだ。

ヤマイタチはエチゴウサギよりずつと小さな動物で、オコジョともいわれ、本州中部以北の高山帯の樹洞、絶壁の小孔、岩隙を生活舞台とするす速い小動物である。細長い体は夏毛では背面、四肢の外面や尾は暗灰褐色で、尾の端の毛が黒い。彼等もやはりキツネネコなどに追まわされる。ヤマイタチは野鼠、野兎、鳥類などを捕殺する。生存競争はここにも彼等の平な生活を乱しているのだ。本州特産の高山獣であるこのヤマイタチもエチゴウサギのように殆

んど冬季は山麓に降る。その頃の彼等の体は光沢のある純白の毛で蔽われ、尾端だけは黒色の毛のままである。その不調和の可愛らしさが、何か自然の法則が彼等の体をそうさせたのだと訴えているかのようだ。こうして山に棲むこれらの動物たちは冬と共に、それぞれの体を冬の体にさせられてしまうのである。



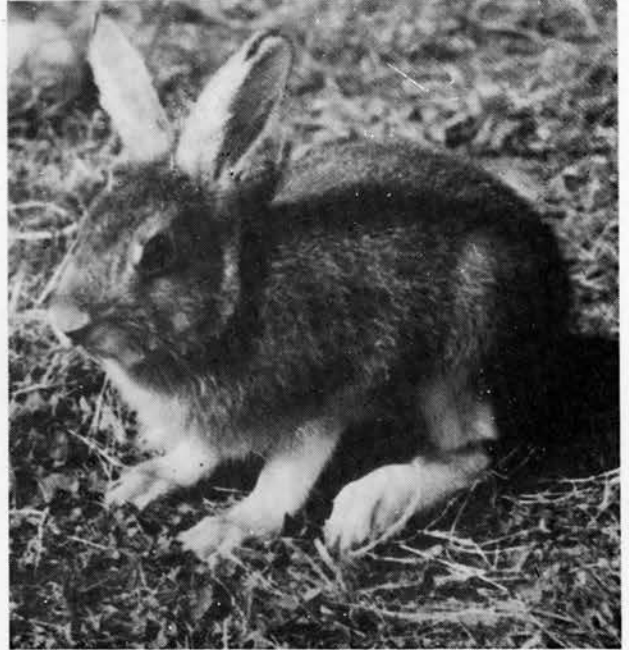
5月頃北アの融雪が始まると、純白の冬羽に黒い羽が混じり始める。



夏山に入ると羽毛はすっかり夏羽になり周囲の岩礫の色に似る。



ヤマイタチの冬毛は純白で尾端の毛のみ黒い。夏毛は暗灰褐色



エチオウサギの冬毛は大きく分けて2型で、一つは不変型で他の一型は白化型である。写真は後者の型で左が冬毛、右が夏毛である。昨年春寄贈をうけ、雑草、野菜で餌付けを行い保護色の变化を観察して来たもので夏毛は黒褐色をおび、北アに雪が訪れる頃胸部から白化する

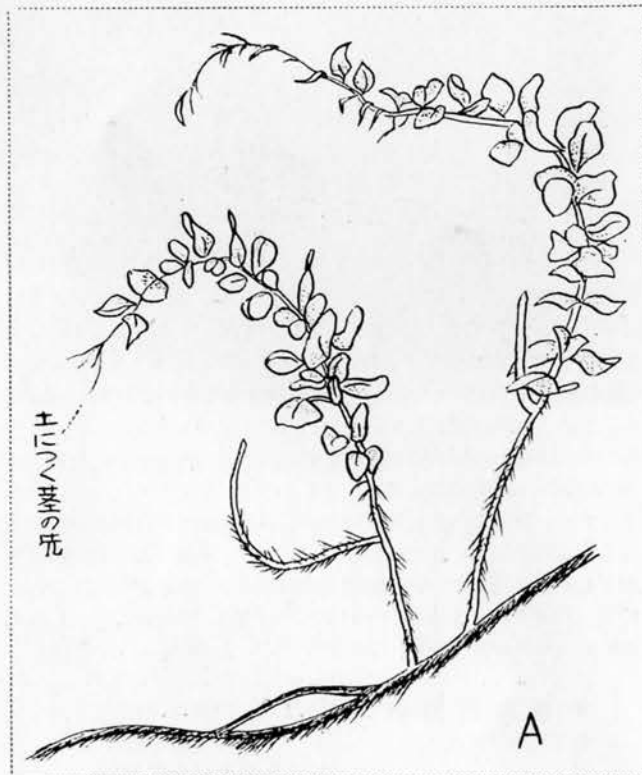
あずみちようちんごけについて

Mrium(Rostrata) TezuKae Sakurai

私たちがふつう「こけ」と呼んでいる植物の仲間、学問的には「蘚苔類」という植物の分類大系に属するものの総称です。この蘚苔類は、一般にしめりけの多い所を好んで生えるもので、湿度の高い日本には、諸外国にくらべてより多くの種類が生育しているとい

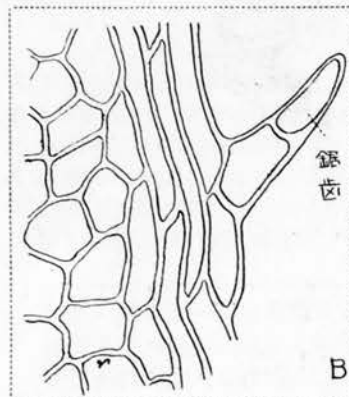
われ、現在日本に産するものとして、約3000種があげられていますけれども、このように蘚苔類は一様たくさんの種類が記録されているのですが、たとえば、食べられるとか、薬になるとかいうように直接人のためになることがないので、また、小さくて研究するのに難しい植物なので、興味を持つ人が少なく、まだまだ今後の研究に期待されるところが多く、新しい種類が方ほうで発見されつつあります。ことにわが日本アルプス地方からは、最近ぞくぞくと新種、珍種が見出されており、今後私たちが、より精密な調査を行うことによつて、日本の蘚苔類研究の発展に大いに寄与するであろう種類がたくさん発見されることが予想されます。

さて、ここにあげた「あずみちようちんごけ」は、胞子の出来る袋が（胞子嚢という）ちようちんの形をした「ちようちんごけ科」という蘚類の仲間の1種で、昭和27年、居谷里の水源地内の土上で採集されたものでありますが、日本で初めての種類であることがわかり、東京の共立女子薬科大学の桜井久一博士によつて、「植物研究雑誌」という専門雑誌に、新種として発表されたものであります。特ちようは、1枚の葉の大きさが5mm内外になり、生長した茎の先端が地についてふえて行くので、土上に、高さ3cmぐらいいかたまつてはえています。このこけに似た種類で「おおぼちようちんごけ」という種類がありますが、葉の縁の所にある鋸の歯のようなもの（図参照）が、2~3個の細胞よりなつてることがちがいます。「あずみちようちんごけ」という名まえは、安曇野に特に発見されたちようちんごけの1種ということからつけられたものだからです。



A 全形

B 葉縁



居谷里湿原からは、このほかまだ正式に発表されていませんが、新種と思われる種類が今までだけでも5種類ほど採集されており、それだけでも、居谷里湿原は植物学的に貴重な場所であると言えらると思います。なお、蘚苔類の採集法、標本のつくり方などについて知りたい方は博物館の方へ問い合せてください。



冬の四ヶ庄盆地の風俗

こつばを待つ人

こつばは雪の深い山村に多く見られるもので、地方によりコスキ、雪コシラベ、コツバなどと呼んでいます。屋根の雪落とし、道路の除雪に用いられ、材料には雪のつかないミネバリ、イタヤなどの材を使用しています。大きさにより色々の種類があり、特に大きなものは12尺位あります。今年は今冬にない大雪で、北ア山麓では人々が除雪に大忙しです。写真は長野県北安曇郡神城村の風俗です。

後援会員募集

博物館後援会の会員を募集しています。年額千円を納める団体ならびに、年額三百円以上を納める個人を正会員といたします。会員には次のような特典があります。

1. 博物館の諸指導行事を通知し参加の便をかける。
2. 毎月「やまと博物館」を配布する。
3. 団体には講師、指導者派遣の求めに応じる。
4. 博物館に支障のない限り、博物館の資料（標本、図書、写真、図板等）器具の借出しをあつせんする。
5. その他博物館で種名同定、研究指導など諸種の便宜をうけるあつせんをする。
6. いつでも博物館を無料で観覧できる。

【博物館より】 2月20日集箱のしおり発行 21日集箱のかけ方と作り方発行 25日居谷里地区調査打合せ 3月2日学芸部会（居谷里調査打合） 5日田辺和雄氏来館（カモシカ撮影、高山植物スライド鑑賞） 9日富士映画者今村氏来館（映画撮影打合） 10～12日居谷里調査打合せ 15日博物館学級開設準備会 17日～18日野兎狩り（鹿島槍山麓、大町営林署と協力）

お知らせ 本紙の購読を御希望の方には実費1部10円でおわけします。但し遠方の方は郵送料の実費をいただきます。 大町山岳博物館後援会

開発される大町スキー場

今シーズン大町スキー場を訪れたスキーヤーは約3万人、積雪に恵まれて連日にぎわっています。市ではリフト建設を計画していますが、博物館でも同地周辺の雪質調査を行っています。（写真下）



かもしか 岳た子ちゃん の名前は 岳け子ちゃん

募集中のかもしか嬢の名前は、締切の15日までに県の内外から58名の皆さんが応募されました。博物館では慎重審査の上「岳子」（たけ子）を選び近く命名することになりました。多数の応募者の方から次の10名の皆さんが抽選で入賞と決まり、近く博物館から賞品が送られます。◇入賞 山崎節子（大町市五日町） 大庭政子（大黒町2の6） 福田美佐子（松本市下横田町） 吉沢哲郎（大町市下仲町） 淀求馬（南小谷村川内） ◇佳作 宮坂又男（諏訪郡原村） 小林しげる（上伊那郡辰野町土屋病院） 藤松良一（南安曇郡三郷村） 前田寛（南安曇郡安曇村） 横沢とみ代（東筑摩郡筑摩地村上田）

動物がぞくぞく入館

總天然色映画「アルプスの鷲」に出演するため、今月末からいろいろの動物が博物館入りします。まず20日頃東京から親グマ、仔グマ、キツネなど6匹を第1陣として、シカ、仔ジカ、小ザル、イノシシなど20匹が引き続き入館します。映画撮影が終るまで博物館で保管し、一般にも公開されます。場所は本館の東側空地。

「日本アルプスの鷲」という動植物生態映画の撮影が3月下旬から本館の協力で開始されますが、撮影に当って下記についてみなさんの協力を望んでいます。

◎郡内でリス、カラス、カケス、その他鳥獣類の巣をみつけたら、ただちに博物館へ御連絡下さい。

◎ウソ、カケス、アトリ等の野鳥を飼育している方や捕獲された方がありましたら御提供下さるよう御願います。以上について連絡或いは提供して下さいました方には薄謝を呈します

（今月の寄贈）ホンシユウモモンガ1体 大町市高根町倉科徳勇氏 チョウゲンボウ1体 大町市俵町峰村和男氏、サルの胎児1体 大町市常盤清水降旗澤氏、キジ雄1体 大町市俵町西沢一義氏。

編集後記 春の足音がすぐそこで聞えているのに、北アルプスの山麓はまだ雪に覆われています。こゝでは本当の春はまだ遠いようです。四月から博物館の居谷里調査が始められますが、本紙も調査の模様を多角的に載せていくつもりです。後援会には大ぜいの皆さんから、新しく入会していただいておりますが、今後ともますます会を発展させていきたいと思っております。本紙については御感想をどしどしお寄せ下さい。編集上の御希望などもお聞かせ下さい。訂正 前号3頁「かもしか」に就ての「身長は1cmくらい」は1mに、「シラビなどの葉」はシラビソにつき、訂正いたします。

やまと博物館 No.2 1956.3.20発行
編集 発行人 大町山岳博物館
発行所 大町山岳博物館後援会
長野県大町市神楽町電話211番
印刷所 信州印刷株式会社